



と www.tenpla.net

プラネタリウム

vol. 216

高梨直紘 (東京大学) / ☆ 平松正顕 (国立天文台)

2022年3月号の本誌コラムで、筆者(平松)が書籍『宇宙はどのような姿をしているのか』(ベレ出版)を執筆したことをご紹介しました。好奇心旺盛なカルチャーセンターの受講者さんたちを思い浮かべながら書いたので、370ページという非常に(過剰に?)読み応えのある本になってしまいました。「宇宙についてもっと知りたい」という方にはお勧めできるものの、初めて宇宙の本を読むという人にはなかなか勧めにくい本であることは否めません。

いろんな年齢の人がより親しみやすい形態のひとつは、絵本でしょう。筆者が子どものころにどんな絵本を読んでいたか、実はあまり覚えていません。日本昔話、ノタン、恐竜の本も持っていた記憶がありますが、宇宙の絵本には触れていなかったかも…?

とはいえ、本屋さんに行けば宇宙をテーマにした絵本もたくさん見つかります。古典的な名作と言えば、加古里子(かこさとし)著『宇宙』(福音館書店)でしょう。当時まだ計画中だった野辺山45m望遠鏡が表紙にあらわれたこの本、宇宙をテーマにした絵本なのに、自分の体の何倍も高くジャンプできるノミの話から始まります。速く走る動物や飛ぶ鳥の話、列車や飛行機の話、空の構造と重力と脱出速度の話を経て、太陽系、恒星の世界、銀河系、「島宇宙」、そして150億光年の宇宙全体にまで話が膨らんでいきます。初版は1978年ですので、掲載されている情報としては古びてしまっているものもあります。銀河を指す「島宇宙」という古めかしい言葉は今の時代には使われませんが、宇宙年齢も最新の値とは違います。それでも話のエッセンスは今でも十分通用するものです。あとがきをよむと、数値はこれから更新されていくだろうが、科学の進歩に思いをはせながら読者が加筆してほしい、と書かれてあって、長い期間読まれることを想定した凄みも感じさせます。何よりページ内の情報密度が高く、さらっと本文を読んでも面白く、ページ内の隅々まで見渡すとまた新たな発見があるという懐の深さも素晴らしい名作だと思います。

もうひとつ、宇宙、というか世界をテーマにした絵本で感銘を受けたのは、オリヴァー・ジェファーズ著、tupera tupera訳『ほら、ここにいるよ このちきゅうでくらすためのメモ』です。子

優しく宇宙を語る、希望に満ちた絵本を作りたい。こんな時代だからこそ、広い宇宙の中の私たちという観点をより分かりやすく提示してみたいのです。

子どもが生まれたばかりのお父さんが、その子どものために作った絵本とのこと。タイトル通り、地球がどんな世界であるのかをやさしく紹介しています。いろんな人、いろんな生き物、いろんな地形があること、時間というものがあること、まだわからないことがたくさんあること、それを解き明かしていくのは子どもたちで、でもわからなくなったらまわりに聞けばいいんだよ、と愛にあふれた言葉遣いと優しいタッチのイラストで語り掛けてくれます。科学的事実だけを伝える本ではありませんが、世界の見方・向き合い方を教えてくれる良い本です。

というような良書がたくさんある中で、私はどんな絵本を作りたいのか。拙著『宇宙はどのような姿をしているのか』は、地球からどんどん遠ざかりながら様々なスケールの天体たちを見ていくという構成にしています。同じ方法論で、エッセンスをぎゅっと絞り込んで宇宙の広さ、宇宙の豊かさ、人と宇宙のつながりを示せたら良いなと思っています。でも、少し盛り込みすぎかもしれません。人と宇宙のつながりだけにテーマを絞って、生命のルーツを宇宙にたどり、星の一生と元素合成を絡めて紹介するのもいいかもしれません。科学的な事実だけを淡々と述べると退屈な本になってしまうので、親子が時間旅行をすとか、宇宙空間を旅行すとか、何らかのストーリーも必要な気がします。なかなか一筋縄ではいかなそうですが、でも構想を練るのは楽しいですね。そのためにスケッチブックも買ったので、試行錯誤してるところから始めるのが良いのでしょうか。あ、もしこれをお読みの出版関係の方がいらっしゃったら、ぜひ一緒にご検討いただけないでしょうか。



お手本にしたい、2冊の絵本。